

# 作家と胃弱



## 阿部公彦

「次はどんな仕事をされるのですか？」と訊かれることがある。次の仕事。何という清々しい言葉だろう。壮大なプロジェクト。大いなる野望。まるで悠々と広がる大海原に乗り出していく冒険家のような気分になる。

もちろん、一瞬のことだ。

次の仕事と言えば、「レポートを出し忘れました。どうか単位をください！」みたいな学生の嘆願メールへの冷たい返信だったり、「今後二カ月間の朝昼晩の都合を○×で知らせよ」という委員会の日程調整メールへの返事だったり(記入するのに十五分くらいかかる)、科研費の実

績報告書にハンコを押し忘れているからすぐ出し直せ、という命令への対応だったりする(もちろん、悪いのは私だ)。

しかし、そんな私でも大海原を想起させるようなプロジェクトに巡りあうことがある。「次はどんなお仕事を……？」という問いに対し「押し忘れたハンコを押しに行きます」という野暮な答えのかわりに私が今、用意しているのは「胃弱プロジェクト」である。次の仕事？はい、作家の胃弱について考えています。

これはデタラメではない。この数年、暇さえあれば、私は作家と胃弱について考えてきた。その延長上で、日本英文学

会関東支部のシンポジウムでは「ゲロの謎」という発表もしたし、国文学系の学会では「漱石のおなかの具合」という発表もする予定だ。「むかつきの真相」という原稿も書きたい。今、私の目には世界が胃弱の色に染まって見える。

だから、以前、朝日新聞の土曜版連載「作家の口福」で佐藤正午の「海賊の酒盛り」(二〇一五年六月六日)という記事が載ったときには、嬉しさのあまり思わずジャンプしそうになった。タイトルの通り、この連載は作家たちが食とのかかわりを綴るもので、多くの作家は思い出の一品や、好物について語っている。

ところが佐藤は違った。彼は胃弱の人なのだ。小学校の給食以来、思い浮かぶのは嫌いな物、食べたくない物ばかり。給食が食べきれず、ずっと教室に残されたという拷問のような体験もある。今でも、とりたてて好きな食べ物などない。

ここまで読んで私は「しめた！」と思った。そうか、佐藤正午こそ私が求めていた作家だったのだ。

佐世保に住むこの胃弱作家のところにも、打ち合わせのために東京から編集者がやってくる。せっかくだから食事も、となる。するとどの編集者も必ず生ビールをジョッキで注文する。真夏ならわかる。ところが彼らは季節に関係なく冷たい生のジョッキなのだ。胃弱作家がお腹をカイロで暖めているような真冬でもおかまいなし。しかも、おかわりまでする。佐藤は啞然とするしかない。

「どんな胃袋をしているんだよ、と僕は思う。海賊か。九州に遠征した海賊の酒盛りか。僕は人質か？ でもそれ

は思うだけで言わない。言えば仕事に支障をきたすかもしれないので言わない。海賊のかしらのような飲みっぷりを、黙って見守っている。」

彼は思い出す。そう言えば小学生のときも、毎日の給食を楽しみにして何でももりもり食べる子供たちがいた。あっという間に食事を終わらせ校庭に飛び出して元気に遊ぶ連中だ。いつまでも給食と格闘していた自分とは別世界の子供たちだ。「ああいう子供が、こういう不死身の胃袋を持つ大人になるんだろうな」と佐藤はしみじみ思う。

まさに我が意を得たりだ。このクソ寒いのに、どうしてこの編集者さんたちは冷たい生ビールをジョッキでぐいぐい呑むのだろうか？と芋焼酎のお湯割りにしてみつきながらこっそり思っていたのは私だけではなかったのだ。海賊！何とこの適切な比喩だろう。いっそこを空欄にして、試験問題に出したいくらいだ。選択肢は「1. 海賊」「2. ヒグマ」

「3. 北京原人」「4. アンドレ・ザ・ジャイアント」。簡単すぎるかもしれないが、子供達に胃弱の現実を知ってもらうための問題なので、これで十分だ。

その佐藤正午の『月の満ち欠け』(岩波書店)が刊行された。二十数年ぶりの書き下ろしだという。冒頭から謎めいた雰囲気になった小説である。地方から東京に出てきた男が、東京駅構内で母子と待ち合せている。会話には明らかに緊張感。男は守勢にまわっている。母親に連れられた女の子が自分の記憶をたどる。男が強く否定する。あやしい。女の子は彼の隠し子なのか？ 愛人の子供か？ そんなプロットがぼんやり浮かぶ。

この時点で読者の多くは、この小山内という男が主人公だと決めなくなるだろう。しかし、物語はそんな予測から全く外れた方向に進む。小山内にはかつて妻も子供もいたが、自動車事故で亡くなった。ただ、事故の前、娘の瑠璃には妙な

事があった。原因不明の高熱を発してから、人が変わったようになってしまったのだ。何だか大人びてしまった、と母親が訝る。知っているはずのない昔のことになぜか詳しくなっていた。

物語は幼くして亡くなったはずのこの瑠璃の行方を追うようにして進んでいく。瑠璃はたしかに死んだ。しかし、どうやら完全に消えたわけではない。数十年をへて、瑠璃は今、小山内の前にふたたび現れたのである。それだけではない。かつて瑠璃の中にも、別の女性が生きていたのだ。『月の満ち欠け』は彼女の転生を描いた物語なのである。

贅沢な作品である。瑠璃という一人の幼い女の子の後を追っているだけなのに、さまざまな男や女と新しく出会ってしまふ。単に瑠璃が、脇役としての人物たちとばったり遭遇していくのではない。瑠璃の出会い人物もまた奥深い独自の内面と希望と可能性とをひめた主人公としてゼロから立ち現れる。つまり、彼

らと出会うのは瑠璃ではなく、私たち自身なのだ。私たちの感情移入を十分に受け入れる余地が彼らの人物像にはある。

小説のもっともおいしい部分の一つは、人物登場の場面だ。作家も力をそぐ。一人の人間を登場させるために、どれだけの労力を作家はかけるものか。この作品では、それこそ惜しみなく出合いの瞬間の旨味が書きこまれていく。主人公だったはずの女たちが次々に亡くなるという展開なのに、そこに喪失感よりも何かの満ちてくる充足感が強く感じられるのもそのためではないか。

でも、それだけではない。何かこう、この作家だからこそ書けたものがある。胃弱作家である佐藤正午だから書けた何か。

佐藤には『小説の読み書き』(岩波新書)という実におもしろいエッセイ集がある。一つ一つのエッセイはごく短くて、せいぜい原稿用紙十枚くらい。それぞれが各一篇、近現代の古典的名作をとりあ

げている。川端康成『雪国』や志賀直哉『暗夜行路』からはじまって開高健『夏の闇』、吉行淳之介『技巧的生活』、最後は佐藤自身の『取り扱い注意』まで、全部で二十五篇というラインナップである。

このエッセイ集の趣向としておもしろいのは、作品を読み解いていく過程が、作家の出会いとして、読みの体験として描かれていることである。作品の価値を抽象的に語ったり分析したりするよりも、佐藤自身が生活の中でどんなふうに関わりあったかに話の基点がある。単なる印象主義ではない。書き手の気分や趣味も話題になるが、提示される洞察には奥行きがあって、思わず「なるほど」と手を打ちたくなる。個人の事情から出発しながら、誰もが共有できる話につながる。何より、作品を読みたくないのでいい。

ここに發揮されているのが、胃弱者の視点ではないかと私は思う。たとえば、

である。まるで推理小説のようだが、単純に犯人を言い当てるという話ではない。反芻と逸脱が続く。飲みこんで消化してしまえ、というのではない。

『月の満ち欠け』でも、微妙に逸れながら新しいものに出会っていく感性が生きている。ミステリーがミステリーを呼び、問いも立てられるが、犯人が曝かれるわけではない。むしろ犯人が曝かれないまま謎が消化されずに次々に新しい生命が生まれてくるプロセスに私たちは魅せられてしまう。哀しい物語だが、どこかほっとする。少なくとも、海賊譚ではないようだ。(あべまさひこ・英文学)

『雪国』は何度読んでもわからないと佐藤は首をかしげる。どこがわからないのか。筋はごく単純で、登場人物も少ない。難解な文章でもない。でも、主人公の島村が「無為徒食で、酒を飲まず、小太りで、妻子持ち」という設定がどうしても解せないという。せめて島村が独身だったり、酒飲みだったり、会社員だったりして、一つでも異なる要素があれば違う。でも、この取り合わせでは一人の人物として焦点を結ばないという。

なるほど、と思う。いかにも胃弱者らしい見方ではないか。答えが出そうにならないのに拘泥し、いつまでも反芻して

るこの消化不良な感じ。その消化不良の実感そのものを読み、かつ楽しんでしまいうしぶとさ。さりげなく人物の飲食癖にも目が向いている。私がとりわけ好きなのは、森鷗外『雁』を扱った章だ。佐藤は『雁』の筋書きをすっかり忘れてしまったという。でも、そこにサバの味噌煮の話が出てくることだけは覚えていた。なぜか。佐藤は年に一度か二度、サバの味噌煮を食べる。そのとき、いつも『雁』を思い出すという。うーん。はあ、そうですかあ、と言いたくなるかもしれないが、そこからおもしろい。佐藤の反芻が始まり、思わぬ読みが展開するの

400周年  
法藏館  
http://www.hozokan.co.jp

## かがみ 鏡鑑としての中国の歴史

磯波 護著 「歴史が過去を映した鏡であることは確かだが、ゆがんだ鏡には十分に気をつけないと、危険なのである。」  
平明で深い、多彩な文章で示される中国史の見方学び方。



二、五〇〇円十税

## 鎌倉仏教と専修念仏

平 雅行著 顕密体制論が提起されてから40年以上が経過し、なお多くの課題を抱えているにせよ一定の達成をみることでできた現在、その積極面だけではなく難点まで含め、率直に問い直す。



九、〇〇〇円十税

〒600-8153 京都市下京区正面通烏丸東入  
Tel.075-343-0458 Fax.075-371-0458  
info@hozokan.co.jp 新刊メール配信!  
税別 お買上15,000円以上送料無料!